【国際学会トピックス】

第25回国際社会福祉会議に参加して

——アフリカ・モロッコ（マラケシュ）会議の提起したもの——

佐藤　進

1. 国際社会福祉会議について

1990年6月のモロッコでの第25回国際社会福祉会議も，アフリカでの二度目の会議で（1974年にナイロビで「開発と参加」のテーマで行われた），当初は4年ごとであったのが，第二次大戦後は2年ごとの開会で，25回を数えるにいたった。第1回国際社会福祉会議がパリで開催されて以来，欧米諸国，中東，アジア，アフリカなどの各地で社会福祉問題を国際的に討議するNGO機関の会議として世界的に大きな寄与をしてきたことは否めない。ここ数年の国際社会福祉会議の柱となった共通テーマと開催地をみると，

1986（第23回）「家族とコミュニティの強化—福祉社会の実現をめざして—」（日本，東京）[1]，1988（第24回）「福祉と法」（西ドイツ，ベルリン）[2]についで，1990（第25回）「地域開発の人間的側面—チャレンジをうけいれるために」（モロッコ，マラケシュ市）である。なお，次回の第26回は，1992年，タイ・バンコク市で開催されることが決定をみている。

2. 第25回会議の討議内容

(1) 1990年7月24日～29日にかけて会議の開催されたマラケシュ市は，アフリカのモロッコ王国の中央部，人口約53万，第4の町で（マラケシュとは，茶色の町の意味で建物が茶色の土の色をしている。），近代化の中に古いアラビックの面影と生活を残す町であった。7月の気温は，35℃をこす日ざしの暑い内陸部であるが，湿度は少なかった。

会議の参加者は，地元のモロッコを含め世界66ヵ国，約600名の人が集まり，日本からは国際社会福祉協議会日本委員会のスタッフの御努力で，40数名が参加した。かつての宗主国フランスなど，西欧諸国の出席者が多かったことはいうまでもない。

(2) この第25回会議の共通討議の柱は，＜地域開発の人間的側面—チャレンジをうけいれるために—＞で，今日，世界，国内の南北問題，そしてそこでは地域開発，そしてその開発の地域での現実が問題として論ぜられてきた。そして，とりわけ，この地域開発計画が人間の顔をもつべきことの諸問題が認識されつつあることから，いわゆる経済開発と社会開発とのバランスのためのベースは何かが，南のモロッコの場で，論議が深められることに意義があったように思われるのである。

基調演説にみられた地域開発と社会開発のバランスの覚醒は，小地域に住み，暮らしていた貧しい，しかし近隣の産業に，都市に依存して

いた人々が，産業の危機に直面して，深い影響をうけたことからおこり，「地域の住民は大産業中心地に依存しなければならない」という原則を捨て，地方住民自身の精神とノウ・ハウで，我々の能力を最高にまで高めて我々自身の自由になる富をもつという原則で進もうという言葉に刺激され，それに答えることから出発したということは，このモロッコの討議においてきわめて示唆的なものであった。そして，社会的，人的，文化的，歴史的な現実にもっとも近づくことのできる地域で，人間の顔をした地域開発の在り方を，総合的に考えることが提起されたのは，極めて印象的であった[3]。

(3)　1990年6月24日の開会式は，前述の柱についての基調演説説から始まって，モロッコの心暖まる伝統文化のパフォマンスによって始められた。

そして，前述の基調演説を軸に，会議期間中，全体会議が，「地域開発―その内容と関連課題」，「地域開発の人間的側面」，「地域開発―実践とその実現の歩み」，「モロッコにおける地域開発の動態」というテーマで各報告会議が行われた。

そして，これらにかかわって課題別討議も，「地域開発の文化的基盤」，「社会的諸資源の動員化」，「地域レベルにおける社会参加者の共働」，「人々のかかわりあい参加問題」，「政治形成における地域現実を活性化すること」などが，報告され，これをめぐって問題が提起されたのである。

そして，会議中，さらに各分科会がもたれ，「労働と雇用」，「保健」，「言語」，「教育と訓練」，「住宅，都市計画」，「環境」，「栄養」，「地域民主主義の構築」，「社会連帯の創造」，「地域，国家政策に，地方開発をリンクさせること」，「地域開発の行政運営の諸側面」にわたって11部門で論議が行われた。

なお，この国際会議では，ホスト国，モロッコの諸問題について，前記の分科会テーマに即して，7つの委員会方式で報告討論が行われたのである。

このほか，各国の大学の関係者による関係論文発表が28ほど行われたことも，これまでの国際会議にみられなかった地域性を前提に，地域開発の人間的側面をとりあげたのは注目すべきプログラムであったのである。

なお，この会議において，国際社会福祉協議会日本委員会の故ローレンス・トムソン氏に，国際会議は，国際社協活動に尽力されたその業績に対し，栄誉をたたえる表彰を行い，子息で，アメリカのソシアルワーカーとして活躍されているステッヘン・トムソン氏に栄誉証が手渡されたことは，日本のみならず，世界の社協の社協活動に貢献された故トムソン氏の活動を改めて思い出させてくれたものであった。私事ながら筆者も，故トムソン氏に1988年，西ドイツでの会議での，日本委員会報告書作成に心からの御助力をいただき，ドイツの西ベルリンでの高齢者ホームに，御一緒した故トムソン氏の真摯な姿を思い浮かべ，社協活動を通じて，世界のかけ橋として活躍された故トムソン氏の改めて偉大な業績を思い知ったことを記しておきたい。

(4)　モロッコ王国が，この第25回国際会議の場，基軸テーマに即応するように，国際社協プログラム委員会とともに，南の国の一つであるモロッコの地域的特色を会議に出すような，モロッコの地域開発とその人間的側面に関する問題提起していることは前述のように極めて注目すべきことであった。このモロッコで提起され

た，地域開発の人間的側面，人間の顔をした地域開発，すなわち，社会開発とを両立させることが，今日，南と北との国々の課題であることはいうまでもない。ことに経済開発のおくれている南の国々が，北の国々の開発に委ね，それによって，何がもたらされ，その後追的な社会開発になる前に，そのバランスはいうまでもなく，人間の顔をした地域開発をいかに進めるかを，地域住民の参加によってすすめることを強く認識したことは注目すべきことであった。筆者としては，これが，アラブ圏に属し，イスラム原理に根ざす国づくりをしている中進発展途上国家モロッコなどで強く意識されていることに，地域の多様性の問題とともに，それに即応した問題の解決の多様性の提起に共感を覚えたことはいうまでもない。何故ならこのような人間の顔をした地域開発問題，住民参加と計画のもとでの推進と実現は，何も南の国の問題ではなく，北の国の問題でもあることはいうまでもない。わが国でも，企業城下町といわれる各都市の状況をみるとき，その問題はまさに妥当するからである。

3. 最後に

筆者は，この会議への参加を契機に，モロッコの各都市，マラケシュはいうまでもなくカサブランカ，タンジェール，首府ラバト市を旅し，またアフリカ北西部のモロッコ，アルジェリア，チュニジアのいわゆるマグレブ三国の2国，モロッコさらにチュニジアのチュニスを訪れた。

これらの国々は，何れもイスラム諸国で，大きな家族制社会を構成し，所得も，モロッコで1人当たりのＧＮＰ650～700ドル，チュニジアで1,200～1,300ドルで決して豊かではない。人口の高齢化も未だしである。何れの町も，メディナ（城塞）のスーク（市場）を中心に，商工の中小零細企業がひしめいて活気を呈し，インフレの進行もさほどでなくモロッコでは，どの都市でも1ドル＝8ディルハイム，チュニジアでは1ドル＝0.9ディナールと安定し，物乞いも全くみられなかった。マグレブのどの国でも，アラブの国々にみられる女性の眼だけ現わして，顔をスッポリかくしたチャドルスタイルは中高齢婦人層で，若い世代は顔を現わし，一部の若い世代は完全に西欧スタイルで，大きな都市は完全に都市化，西欧化し，一方で伝統との共存を保っていた。しかし，この西欧化，近代化に批判がないわけではない。筆者の帰国後，アルジェリアでは，国内，政治・経済事情も絡んで，反西欧的な，反西欧文明的なイスラム原理への回帰を主張する政党グループの選挙による政治進出が著しいことが報ぜられた。モロッコ，チュニジアには，その動きが目立ってはいなかったが，南の国々では近代化と伝統とのバランスよりも，西欧化，近代化と伝統とのたたかいがなお続くのであろう。（1990.8）

注

1) 永田幹夫「国際社会福祉東京会議が残した課題」（「社会福祉研究」（鉄道弘済会刊）39号（1986年10月））所収，1頁以下。
2) 佐藤　進「第24回国際社会福祉会議―ベルリン会議報告―」（「社会福祉研究」（鉄道弘済会刊）43号（1988年10月））所収，87頁以下。
3) Georges Remion, Cherrman, Int'l programme Committee, Basic Document "The Human Dimention of Local Development ; Accepting the challenge" (1990, Marrakesh) 参照。

（さとう・すすむ　日本女子大学教授）